

【講演記録／「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」浜松講演・展示会】

愛知大学から東亜同文書院へ：「愛大ブランド」の系譜

東亜同文書院大学記念センター長、現代中国学部教授 三好 章

(2017年7月11日、クリエート浜松)

「愛大ブランド」とは？

私が愛大にお世話になったのが1997年です。日本で初めて中国を専門に研究し教育する学部として現代中国学部が出来上がる時でした。その時、勤めていたのは私立の中高一貫校、男子校でした。そこで、高校の漢文の先生がこうおっしゃったのです。

「愛知大学というのは、いい大学ですよ。辞書を作れる大学ですからね。東亜同文書院のことは当然ですが、それだけではなく、辞書を作るだけの学問的蓄積がある大学なのです。言葉の問題として日本と中国の文化、これをトータルに理解するにはきちんとした辞書が必要です。その上で辞書を作れるというのは学問体系として立派なものを持っているからなのです。そうでなければ辞書など作れるはずがない。これは、適当に一人二人でやってるんじゃなくて組織立ってやってるはずだ。」

というのです。その先生は、若いころから漢籍ばかりずっと読んでこられ、授業では高校生相手に頼山陽の『日本外史』を使っているという、かなりの力の持ち主の方でした。この先生は、愛大の辞書編纂処のことはよくご存知ではありませんでしたが、中日大辞典が同文書院に当然由来由来するのだろうということは知っておられました。実際、私が愛大にお世話になりましたあと、辞書編纂処を見ると、明らかにそうだとことがわかります。実は今日のお話の一番最後は、そこに戻ってきます。「愛大ブランド」とは一体何なのでしょう。ブランドというと、何か商

品みたいでゾッとしない言葉ではあります。しかしながら、こうした問題であれば愛知大学に聞けば全部わかる、というように考えていきますと、「愛大ブランド」は中国研究と辞書だろうと思います。この二本柱の根底には、当然ながら同文書院があるということであろうと思います。それが今日のお話の出発点でもあり、また終点でもあります。

愛知大学は近代と現代の結節点

愛知大学はご承知のように1946年に出来上がりました。現在、70年以上経っているわけですが、しかしながら、東亜同文書院の後継大学であるということ、大声で言ってもあまり問題ないという風潮はここ最近のことなのではないでしょうか。書院の先輩方には、はなはだ申し訳ないことですが、愛大設立当初は、東亜同文書院の後継者という位置づけをなるべく避けながら、実態は皆分かっているんですが、そういうポーズを取りながら始まったというところに、愛大と書院の持つ近代史におけるある意味、負の遺産があったのかと思います。愛知大学が後の旧制大学であるということは、日本の近代史の中で非常に大きな意味を持ちます。ところが、同時に戦後の設立であるというところで現代史においても重要な意味を持ってくるかと思えます。つまり、愛知大学は日本の近代、現代の歴史の結節点であり、両者が結びつくところにあると考えられます。愛大の出発点には、ちょうど占領政策がありました。したがって民主化があり、それをそれこそ戦前の総否定として

受け止める向きも強かったわけです。その中に、東亜同文書院も入ってしまいます。もちろん、東亜同文書院が主体的に戦争に関わったわけでは当然ありません。けれども、客観的に協力してしまった、させられてしまった。本来ならば、そういう側面をどう総括するのか、キチンと議論しなければならなかったはずです。しかし、総括する暇もなく学生を受け入れなければならないというのが、現実であったと思います。

愛知大学の東亜同文書院記念センターには多くの写真が収蔵されております。その中の何枚かと同じものを、一昨年夏、舞鶴の「引揚記念館」で見ました。それは「在外父兄救出学生同盟」に関するものでした。それは、戦争が終わる前に外地に自分たちの家があっご両親がそちらにいらっしや、敗戦の結果帰ってこられなくなってしまったわけですが、それを内地にいた学生たちが帰国させようという運動だったのです。東亜同文書院の場合も最後は富山県呉羽でしたから、実質的に内地で入学して勉強していたわけです。その学生たちが海外に残された親たちを救うために頑張ったのです。この運動には宮様も関わりますし新聞社も関わったりしますが、まだ研究が不十分なところ。この運動に愛知大学の学生が非常に大きな役割を果たしているのです。東亜同文書院から編入した学生だろうと思います。つまり同文書院で入学して愛大で卒業する。そういった中の学生たちの何人かがそういう海外に自分たちのご両親を残されてしまい、その引き揚げに本当に努力されたのです。中には、密航状態で今の北朝鮮や満洲やらに行き、現地の共産党系の政府と交渉して親たちを連れて帰って来るなんてことやっている凄い学生もおります。書院などで培われた語学力がものをいったのかもしれない。こうしたことも、戦前と戦後、近代と現代、これが繋がるところに愛知大学があることの一例ではないかと思ひます。

愛知大学の地域研究と東亜同文書院

しかしながら、先程申し上げましたが、戦後の占領政策の中で戦前というものを一緒に否定する動きがあり、その中で東亜同文書院の名前を分かってはいても出せなかったのです。しかし、実態としてそれが繋がっているのが分かるのが、辞書の問題ではないでしょうか。1950年代に入って、東亜同文書院で集めていた辞書のための単語カードが返ってまいります。この単語カードの返還に際して愛知大学本間喜一学長は当然尽力なさいました。そして、中国との間に入っていたのが内山完造、ご承知の方も多いと思ひますが、上海の内山書店の店主でした。書院の成果を生かすため、辞書は作らねばならないというのが愛大の動きであったかと思ひます。それが華日辞典編纂所、現在の中日大辞典編纂処となつていったわけ。具体的には、戦前の『華語萃編』から、今日の『中日大辞典』になつていくわけ。

ついで、あるいは何よりも東亜同文書院といえば「大旅行」が挙がってくるかと思ひます。大旅行は言うまでもなく大調査旅行ですが、今風にいいますと「フィールドワーク」となります。これは、昨2016年度に完了いたしました「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成事業」のなかで行われましたシンポジウム「東亜同文書院の教育と研究」のなかで、アメリカ・ジョージア州立大学のダグラス・レイノルズ先生が高く評価して下さいました。レイノルズの先生のお話では、フィールドワークというのは、特に地域研究とセットになつたフィールドワークは、アメリカも含めて第二次世界大戦後になつてようやく本格化するのかと考えられていた。ところが、東亜同文書院はそれを今から一世紀も前に本気でやっていた。しかも、その中身の質も高く、これは目を見張るべきものではないかというのです。このフィールドワークに支えら

れた現地主義というのが愛知大学におきましては、新設の地域政策学部にも脈々と流れているわけです。また、研究機関としての大学という点からいたしますと、総合郷土研究所、中部地方産業研究所、さらに 21 世紀に入って設置された三遠南信地域研究センターなどに脈々と流れているわけです。いずれもフィールドワークによってその地域のありようを自分の足と目で確認し、それを文献によって整理し、個別のものを具体的にパターンナイズし、典型を見出し、そして現在の諸問題に対応していくという。地域研究の重要なポイントを押さえていると思います。地域に足を踏まえた研究を行っているというのは、東亜同文書院以来の伝統であろうと思います。地域と申しますと、それこそ行政単位としての村もあれば町もあります。それだけでは、何も言っていないのと同じです。すでにある地域を、新たな視点でもう一度くりなおす。くりなおした結果、現在と同じものが出てきたとしても、それはくりなおした結果であって新しい意味が付け加わってきます。「三遠南信」というのは、まさにその典型だろうと思います。一つ一つは行政区画の集まりになりますが、それを越えて広域の経済圏あるいは人の動き交流圏などを考え直すという点で、新たな視野が開けてくるということです。「郷土研」は、時系列をもって地域研究を行うとどうなるか。つまり、昔から今までの時代を時の流れとしますと、時の流れと地域の変化が当然あるわけです。それが「郷土研」の存在理由でもあろうと思います。それらが我々に呼びかけてくるもの、それはやはり書院の活動というものを土台に置いて初めて意味を持つてくるのではないかと思います。

愛知大学と中国研究

また、愛知大学というは何よりも中国研究という評判があるのは承知しております。その中国との関係で言いますと、本学の国際問

題研究所は、1948 年、愛大創立直後に置かれた研究所です。当初は中国問題研究所にしようという話であったと伺っています。しかし、戦後の世界をにらんだ時期に、中国だけではなく、もっと視野を広げようという大義名分もあり、国際問題研究所としました。しかし、愛知大学の蔵書をご覧いただければよく分かることですが、ささしまの国際問題研究所の蔵書は 8 割がた中国関係であります。それもそのはず、この研究所の前身となるのは同文書院の「支那研究部」です。ここで蓄積されたものは、資料だけではなくて研究論文等の実績ですね。「支那研究」というものに表れてまいります。これはまさに日本の中国研究の宝庫です。ただし、書院の中国研究はいわゆるマルクス主義的研究ではございませんので、戦後の一時期あまり顧みられなかったことは事実です。これは、戦後の日本でいわゆる進歩的な研究をやる方が依拠したのがマルクス主義的方法論であったことによります。マルクス主義的方法論を全面的に否定する気はございません。けれども、マルクス主義的方法論で中国を見ますと、遅れていた中国が日本を追い抜いて社会主義を建設したというストーリーになります。近代化において、日本は中国より一歩先に行っていたはずで、それなのに、封建的なものがたくさん残り、だから本来遅れていたと見なしていた中国に日本は飛び越され、中国人は人類の未来である社会主義を建設した、となるのです。現在、こういう説明に納得する方はあまりいらっしゃらないのではないかと思います。それは今の中国を見れば、もう明らかだからでしょう。20 世紀末から 21 世紀はじめ中国に表れている様々な現実、社会事象には、表面的にはやたらに古臭いものが出てきたり、あるいは、前近代的な人と人との繋がりの方が表へ出てきています。これまでも、中国とはなにか、あるいは中国が建設したという社会主義とは何だったのか、そういう問い直

しが行われてきました。現在は、まさしくそういう時期にあっているのだろうと思います。

こうした中で同文書院の行ってきた中国研究を見てみますと、現在の中国に繋がってくるような歴史的伝統中国の存在が、遺物ではなくて生きている存在として捉えられています。遺物であれば、標本として博物館に入れてしまえばよいのですが、標本ではありません。生きた現実として、現在の中国に伝統中国の社会や人の繋がりが現れているのです。こういったところはこれから先、我々もっと研究していかなければいけません。また藤田名誉教授がお書きになった『日中に懸ける』（中日新聞社）という非常に分かりやすい本があります。私も、これを学部生の基礎演習などで使わせてもらっておりますが、この本の冒頭に出てくる根岸侑というような東亜同文書院初期の先生方が研究した内容、これと関わってくるわけです。愛知大学の中国研究の根底に東亜同文書院があって、その同文書院の研究は決して古臭いものではないということが明らかであろうかと思えます。それは、現在の愛知大学の中国研究の原点になるからです。

そうした中国研究というものを土台にしてきたことが、20世紀の最後の10年間に愛知大学が社会的なさらに評価を得ていくことに繋がったのではないかと考えております。1991年の大学院中国研究科の設置がその一例です。一般の大学では学部の上に大学院をのせているのが普通であると考えられていました。愛大でも、それまでは学部の上に大学院を置くというのが一般的でした。ところが、中国研究科は「独立大学院」というのが公的な言い方になりますが、学部横断的に教員を集め、大学全体でこれを育てていく仕組みで出来上りました。さらに93年にはこの愛知大学東亜同文書院大学記念センターが設置されます。本センターは、大学のホームページ

をご覧くださいれば分かるように、単なるプロパガンダではなく、研究機関として位置づけられております。大学史を扱うだけではなく、それが現在の愛知大学の教育研究にいかに関わるか。さらには一愛知大学にとどまらず、日本や世界の教育研究、中国研究にどう関わるかということを示す位置づけであろうかと思えます。さらに97年には現代中国学部、98年には国際コミュニケーション学部と、立て続けに国際系の新しい学部が作られました。こうして、中国との関係が深いのは今まで通り当たり前ですが、さらに世界という位置づけでの国際系学部を設置したと言えるのではないのでしょうか。21世紀に入りまして2003年、文科省からCOEという研究のセンターに指定され、日本中の中国研究の拠点として位置づけをいただきました国際中国学研究センターがあります。また、東亜同文書院記念センターは事業オープンリサーチセンター、私立大学戦略的研究基盤形成事業と立て続けに文科省の研究指定を受けております。愛知大学において、中国研究の中核として育ってきた側面が非常に強いのではないかと思います。

こうして見ていきますと、愛知大学の21世紀に向けてのブランドというものが見えてまいります。具体的には、やはり中国研究と辞書なのです。ただ大学と申しますのは、ご承知のように研究機関でもありますが教育機関でもあります。研究と教育が二本足そろっていませんと、大学とはいえません。具体的に偉そうな言い方をしますとまずは高い研究水準。これがあってこそ質の高い教育ができるのだと思います。学部の1年生に、偉そうな顔して言うのですが、大学の大学たる所以というのはゼミと第二外国語です。中学校、高校では英語しか勉強してこなかったが、大学というところで初めて英語以外の言葉を勉強し、英語以外にも言葉があるということを知るのです。そして、ゼミです。授業はどう

したって一方通行になりがちです。それがゼミでは、学生がお互いに議論して、お互いに同じ本を読んで、相手の言ってることと自分の考えとの違いについて言い合うわけです。それが、教育機関としての大学の大学たる所以ではないでしょうか。しかしこれを学生たちが自分たちだけでやっていくのは大変です。そのためにはまた偉そうな言い方ですが、「世に伯楽有りて然る後に千里の馬有り」と、学生に言います。私は、そんな名伯楽ではありませんが、君たちを名馬にするために良い伯楽になるために努力しているのだ、だから君たちも名馬になってくれたまえ、とゼミの指導を行っています。

教育機関としての東亜同文書院と愛知大学

研究によって教育の質を高めて、よりよい人材を育成するというのが高等教育機関の社会的役割と言えると思います。東亜同文書院とは一体どういう学校であったのかということをつきつめてい言えば、ビジネスマン養成のためのビジネススクールでした。しかし、単に商売が上手いというだけの、薄っぺらなビジネスマンではなく、国際的な仕事を、自分の国の私利私欲のためだけではなくできる人材です。お互いの利益になるようなことを考え、お互いが幸せになるような仕事をする、そういうビジネス人材を養成しようとしてきたといえるでしょう。これが現在の我々の愛知大学における人材育成にも繋がってくるのかと思います。愛知大学の設立趣意書も、「国際」と「地域」にしばしば言及しております。こちらが現在の愛知大学でもそうした人材を養成したいと考えています。まずは、国際社会、地域社会においてグローバルな地域に貢献する市民的教養を備えていなければなりません。これは極めて一般的なことをのようですが、愛知大学の土台にあるものが同文書院ですので、それは筋金入りといってよいかと思えます。

そしてまた、グローバル人材について話さなければなりません。カタカナ言葉ではすこしはやり言葉のようでもありますので国際人という言い方でもよろしいかと思えます。国際人と地域貢献は、分裂してしまっただけではありません。海外で仕事をするのは楽しいのですが、自分の足元を忘れてはならないということです。足元というのは必ずしも出身地、出生地としての自分の土地とは限りません。根無し草にならないためには自分のアイデンティティーが必要なのです。根無し草になってしまうとアイデンティティーが失われ、一体自分は何を基にしてものを考えているのか、その基盤がなくなってしまいます。日本でもアジアでも、あるいは愛知でも静岡でもそれはいいと思います。自分の寄って立つところ、本拠地があってこそ本拠地を乗り越えられる。日本という帰ってくる場所があるからこそ日本を越えて仕事ができるというふうに見ることができるのではないかと思います。ですから、このグローバルであって同時に地域に貢献し、地域を豊かにすることが大切です。しかも、自分たちの地域を豊かにするだけでなく、相手方の地域も豊かにするということが意味を持ちます。留学生ということで考えて見ますと、中国であれ、韓国であれ、そういった留学生が自分のふるさとと少なくとも日本、あるいは東アジア、これを自分のフィールドにして活躍できるような、そういう人材を養成したいと常々考えております。そうした彼らが活躍する地域というのは国際的に見た場合しばしば変動するものですし、したがって常に定義し直さなければなりません。このため、単に今のことが分かればそれで十分とはいえません。時間軸を往き来するような視点や思考方法が求められるのです。

東亜同文書院の中国研究を見ていきますと、愛知大学が中心的に考えております研究対象としての中国とは、必ずしも一致するわ

けではありません。単に領域というところだけを考えてみても、それこそ秦の始皇帝の頃の中国と、唐の頃の中国と、宋代と、今とそれぞれ全然違います。同じ中国という言葉で考えてしまいがちですが、実は伸びたり縮んだりしています。時には消えかかって地方政権になったりしたこともありました。講義で前近代の歴史を話す時、例えば「宋は地方政権だから」というと、一部の中国人留学生は驚き、そして嫌な顔をする者もいます。中国では、常に自分たちが中心でいたと思いたい気持ちが強いのです。このことは、今の中国が「韜光養晦」といって、これまで立場が弱かったので隠していたのを、いまは十分に強く大きくなったんだから力を出すんだといって、「大国化」に向けて背伸びをしています。その時、現在と近代、さらに伝統中国とをア prioriに同一視しようすることからも理解できます。過去に遡って、中国はいつでも立派だったと思いたいのです。これに対して、いやそうではない、と言わねばなりません。何故、わざわざ日本に留学しに来たのか。自分たちの国を外から見直さなくてはだめではないか、と言います。これが大切なのだと思います。それこそ大昔の明朝、清朝という最後の中華帝国の時期、打ちひしがれた民国の時期と、独りよがりになってしまった毛沢東の時代、そして、国際社会に復帰し始めた現在。全然違う中国の姿が見えてくるはずです。中国の影響も全く異なっています。しかし、貫くものもあるはずです。ここで、「不易」と「流行」という言葉の意味を噛みしめなければならないと思います。流行があるのは不易があるからなのです。不易であるものをきちんと把握するのはある意味、経済的な利益だけに終わらない、大学というところの仕事だろうと思っています。

おわりに

最後にもう一度、東亜同文書院の 45 年を

愛知大学の 70 年がいかに関承するののかというのを考えていた時、東亜同文書院の研究と教育の中で特筆すべき事態が中国で起こりました。それが中国の国家図書館、日本で言えば国会図書館に残っていた東亜同文書院生の手書き資料、我々の先輩たちの残してきたものを中国側が無断で複製したのです。どうしてそんなことをしたのでしょうか。中国では現在、満鉄の調査資料も続々と複製しています。日本語のものもありますが、そのまま複製しています。これは、中国側が戦前の日本の調査資料の重要さに気が付いただけではなく、自分たちに欠けているものに気が付きはじめたからであると思います。この中国側の資料叢刊は全 100 巻ですが、中心になるのは 1931 年から 43 年、書院最末期の資料です。要するに持ち帰ることができなかった資料です。それ以前のは同文会に送ってありますので日本にあります。ということは、愛大にあります。ようやく処理すべき全体的な手稿資料が手に入ったということになるかと思えます。辞書の関係では『中日大辞典』がデータベース化を進めています。こうして我々のブランドとなっていく東亜同文書院と愛知大学が、繋がって一本のものとなろうとしています。そしてこれが、21 世紀に新たな日本、中国、さらにそれを通じた新たな世界像を提供できるのではないかと思います。書院そのもののあり方も、もちろん 45 年間すべてが問題なしであったわけではありません。やむを得ずながらも、戦争に協力してしまった側面もあります。そういうところはきちんと検証した上で、きちんと評価するところは評価し、総括して批判すべきところは批判して現在に繋げていきたいと考えております。

なかなかまとまりがない話で申し訳ございませんけれども、愛知大学 70 年とブランド作りというところでお話させていただきました。

東亜同文書院の45年、愛知大学の70年
浜松 講演会

13:40-14:10

「愛知大学70周年と更なるブランドづくりをめざして」

(愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好章)

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

「愛知大学70周年と更なるブランドづくりをめざして」

東亜同文書院から愛知大学へ



愛知大学東亜同文書院大学記念センター

「愛知大学70周年と更なるブランドづくりをめざして」

愛知大学設立趣意書〔一部抜粋〕

(一九四六年十一月十五日創立)

第一、本大学ノ所在地ハ之ヲ中部日本ノ一地方都市（愛知縣豊橋市）ニ置クノデアルガ、……大都市ヘノ偏重集積ヲ排シ地方分散コソ望マントノ趣旨ヲ活カサントスル

第二、世界文化ト平和ニ寄與スヘキ新日本ノ建設ニ適スル人材ハ國際的教養ト視野ヲ持つコト最モ必要ナル資格ノト思惟セラル事情ニ鑑ミ、……

第三、……中部日本出身學徒（男女）ノ遠隔ノ地ニ學ブ者ニシテ時局下就學不便ノ爲メ轉學セントスル者ノ要望ニ應ルト共ニ外地ノ大学専門學校ニ在籍スル學徒ノ轉入學ノ困難ヲモ緩和セントスルモノデアル。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

「愛知大学70周年と更なるブランドづくりをめざして」

愛知大学の長期ビジョン（抄）

国際社会、地域社会に接して学べる教育機会を提供する大学

| | |
|------|----------------|
| 人材育成 | グローバル人材 |
| | 地域に貢献する人材 |
| | 幅広い市民的教養を備えた人材 |

グローバルな課題やローカルな課題を含む様々な新しい研究課題に積極的に取り組む大学

愛知大学東亜同文書院大学記念センター